

1. 有病率に影響を与えると考えられる要因

- 有病率には発症率、罹病期間(予後)が影響する
- 肥満、飲酒、糖尿病、脂質異常症、運動不足などのコントロール状況が発症率に影響する
- 罹病期間に影響を与える要因として(特に終末期における)医療行動の違いも考慮する必要がある(日本では最後まで手厚い医療・介護を続ける傾向がある)

2. 日本の状況

- 日本においてはもともと肥満、飲酒、糖尿病、脂質異常症、運動不足などのコントロール状況が欧米よりも良く、1980年頃から脳血管性認知症(VaD)の有病率は低下していた
- その後アルツハイマー病(AD)は増加したため日本では認知症有病率は増加した
- ADでは発症率の上昇、罹病期間の延長ともにみられている(特に男性におけるAD発症率上昇が大きい)
- AD発症率上昇の要因としては糖尿病有病率の上昇、早期死亡率の低下が考えられる
- 罹病期間の延長傾向については抗認知症薬の普及と介護保険によるケアの向上が要因として考えられる
- VaDについては発症率に時代的变化はなし、罹病期間は延長している

3. 欧米との比較

- 海外では糖尿病や肥満などのコントロール状況の改善が遅れたため最近になり認知症有病率の改善がみられている
- 欧米と比較する際には社会格差や医療制度の違い、それに伴う受診行動の違いに注意が必要
- 欧米のデータにはselection bias, 受診率の問題がある可能性に注意が必要である(英国では発症率は下がっても有病率は変化していないというデータがある)